関西地域のオペラ活動2018

大田美佐子

2018年は、関西の音楽界にとって明るい話題ばかりではなかった。6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨と立て続けに自然災害に見舞われた被害は甚大で、関西二期会や関西歌劇団のホームグラウンドでもあった吹田市のメイシアターでは、ホールの安全点検と大々的な修理を行うことが決まり、2020年8月まで大ホールを含む全館が休館となったため、二期会では予定されていたマスカーニとレオンカヴァッロのヴェリズモ・オペラの上演が、関西歌劇団では第100回定期公演の予定だった《ファルスタッフ》の上演が中止された。しかし、このような事態に直面しながらも、関西二期会は、年末には兵庫県立芸術文化センターの中ホールでリムスキー・コルサコフの《サルタン王の物語》を上演して成功をおさめるなど、関西の劇場間で相互に助け合う柔軟な体制があり、観客として頼もしく感じられた。自主制作だけでなく、劇場運営として骨太のポリシーをもつ劇場が関西のオペラ文化のみならず音楽界全体を盛り上げる。気候変動で、災害の危険性に対して十分に配慮されなければならない時代にあって、人々の生活を彩る文化芸術の力をどのように発揮していくべきか、あらためて大きく重要な課題と感じた一年であった。

オペラ公演には、歌手、指揮者、オーケストラなどの音楽家だけでなく、演出家、舞台装置、歴史家、組織運営など、多くの人々が関わる。多種多様な人々が関わるオペラ公演は、人材育成の面でも重要な役割を果たし、学際的で知的好奇心を育てる演目は、地域の文化力をも育てる。そのような認識を学校教育の現場でも共有し、若い聴衆を育てること

は大きな課題である。関西では、プロのオペラ団体、オペラを定期的に制作している劇場を中心に、演目と観客、社会の間の媒介者のような存在である「ドラマトゥルク」の存在も注目されてくるだろう。どのようなオペラを上演し、どのようなかたちで観客に届けるのか、はもはや地域的な問題を越えて、世界的ともいえる。2018年の関西圏のオペラ活動について、以下の3点に整理して主な公演を報告する。その項目とは、Ⅰ．関西を拠点に活動するプロの団体のオペラ活動。Ⅱ．プロと協働しながら行われる市民オペラ活動。Ⅲ．総合的な芸術表現であるオペラというジャンルの枠組みを問はずような、特筆すべき「クロスオーバー」な試みについてである。古楽に関する息の長い試みは関西の特徴でもあるが、2018年はいずみホールの古楽シリーズをはじめ、関西のホール全体に浸透してきた感がある。現代作品はまだ弱いが、バロックからやがて21世紀の作品まで、関西でもオペラの裾野は広がっていくだろう。

大きな団体の公演情報については巻末にデータが記されているので、省略する。また、関西地域のオペラ振興全体に関わる重要な点として、各種メディアで展開されている公演紹介記事、および批評活動を挙げておきたい。近年は、インターネットメディアも興隆し、舞台翌日に批評が出るなど、そのスピード感の特筆に値する。また、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞などの大手新聞メディアの他、京都新聞、神戸新聞、大阪日日新聞など地域に密着した新聞、網羅的に関西の音楽界、舞踊界を活写し続ける専門的なメディアとして関西音楽新聞、全国の活動を網

羅するウェブの音楽批評マガジン(「Mercure des Arts」<http://mercuredesarts.com>)などで展開されている批評活動が、オペラ振興を下支えしている点も強調しておきたい。

I. 関西を拠点に活動する団体のオペラ活動

関西のオペラ公演の中核を担うオペラ団体には、1964年創立の関西二期会、1949年朝比奈隆を中心に創立された関西歌劇団がある。関西圏で活動する演奏者を中心に組織されており、トップアーティストの多くが関西圏の大学で教鞭を取っていることから、関西圏の後進の指導、教育面でも重要な役割を担ってきた。

2018年も、欧州のオペラハウスに倣って芸術監督を冠するびわ湖ホールや兵庫県立芸術文化センターでは、芸術監督がプロデュースを担うオペラ公演が行われた。芸術監督沼尻竜典はリヒャルト・ワーグナーの「ニーベルングの指環」のツィクルスの《ワルキューレ》、佐渡裕芸術監督はウェーバーの《魔弾の射手》。新演出で作品の意味を現代に問う上演が行われた。また、観客の知的な関心を深めるレクチャーやアウトリーチ活動も精力的に行われた。びわ湖ホールも兵庫県立芸術文化センターもともに、オペラにおいても戦略的に小・中・大のホールを使用し、多角的なオペラ芸術の魅力を引き出している。加えて、びわ湖ホールでは演出家やオペラの指揮者を中心に、兵庫県立芸術文化センターではオーケストラなどを中心に、引き続きオペラ上演を担う次世代の人材育成にも力を入れている。びわ湖ホールも兵庫県立芸術文化センターも、海外から演出家を呼び、日本の歌手やスタッフと人的交流を深めるなど、プロダクション内部の国際性が豊かである。兵庫県立芸術文化センターでは、その斬新な映像表現の舞台で、センセーショナルな成功を取めたドイツのベルリン・コーミッシェ・オー

パーの《魔笛》(演出：バリー・コスキー、スザン・アンドレイド)の客演などもあり、関西に海外の先端的なオペラを紹介する重要な役割も果たしている。

フェスティバルホールも、大阪国際フェスティバルなどの祝祭的なイベントを中心に、ロッシーニの《チェネレントラ》やイタリア・バーリ歌劇場のプッチーニの《トゥーランドット》を招聘し、オペラの上演場所として重要な役割を果たしている。いずみホールやあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは演出などに工夫を凝らし、音響の良さやコンパクトな空間を活かしていわゆる「ホール・オペラ」や「サロンオペラ」に重きを置いているが、本年も継続して、ザ・フェニックスホールでは関西二期会によるサロンオペラの企画として、モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》、プーランクの《人間の声》とストラヴィンスキーの《夜鳴きうぐいす》が上演された。

また、地域に根づいて充実した活動を続ける堺シティオペラは、本公演ではなく、研修所の公演としてチマローザの《秘密の結婚》(演技指導：岩田達宗、指導・指揮：坂口尚平、ピアノ：山本麻代、於堺市立文化会館)と、ラヴェルの《子どもと魔法》(演出：やまかわひろき、指揮：坂口尚平、ピアノ：西聡美、於ウェスティホール堺市西文化会館)、みつなかオペラはプッチーニの《トスカ》(指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、於川西市みつなかホール)を上演した。市民とプロとが協働し、地域のオペラ文化振興に重要な役割を果たしている市民オペラでは、伊丹市民オペラでロッシーニ《セヴィリアの理髪師》(於東りいたみホール)、芦屋市民オペラでヨハン・シュトラウスⅡ世《こうもり》が上演された。

関西圏のオペラ公演では、個性豊かなシン

フォニーオケがピットに入る点が魅力的である。オーケストラも個性的な芸術監督のもと、戦略的なプログラムによって、それぞれの音楽的アイデンティティが際立ち、多様性の時代に相応しく、それぞれの団体の特質ある個性が育ってきている。

1. 関西二期会

関西二期会は、第89回オペラ公演でマスターニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》とレオンカヴァッロの《バリアッチ》を上演予定だったが、6月の大阪北部地震で吹田市メイシアター大ホールが使用できず、公演は中止となった。第90回オペラ公演は、兵庫県立芸術文化センター中ホールで、リムスキー・コルサコフの《サルタン王の物語》(指揮：柴田真郁、演出：菅尾友、大阪交響楽団)を上演した。

プーシキンの物語によるこのオペラの演出は、海外経験も豊富な菅尾友。演出家自らが日本語に訳し、小ぶりな中ホールで展開された舞台は、舞台袖や紗幕などの空間を巧みに使って想像力を掻き立てる。エキゾチックな色遣いの優美な衣装など、ロシアのおとぎ話の世界を、絵本を開く身近さで楽しませた。名作でも演奏機会が少ないのはやはり言語の壁だが、明治以来かつては盛んに試みられてきた邦訳歌唱の意味を、今一度想起させた。

特に後半に王子の冒険が始まり、ドラマが幸福な方向に向かうと、「熊蜂の飛行」をはじめ音楽も求心力が高まりを見せた。変身ものは、テクノロジーの発達によりリアルな演出が増えたが、「おとぎ話」では、観客のイメージネーションこそが魔法の空間を現出させ、声の魔術を際立たせる。その意味で末娘役の末廣亜矢子、姫役の熊谷綾乃の好演は出色の出来であった。

豪雨と台風、地震被害に見舞われた関西では、ホールの老朽化などの様々な困難もあっ

た。ホールのサイズにあった上演や示唆に富んだ舞台は、オペラの未来に希望を与えるものだ。

2. 関西歌劇団

吹田市メイシアターで予定されていた第100回の定期公演《ファルスタッフ》は、大阪北部地震での被害により中止となったが、6月には兵庫県立芸術文化センター中ホールで、恒例のスプリングオペラの枠組みで、モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》が上演された。ピアノ版を使用。演出は、テノール歌手で落語家としても活躍する橋本恵史で、字幕の粋な大阪弁といい、バランスの良いエンターテイメントとして仕上げた(関西音楽新聞・村田英也 評)という評価を得た。タイトルの「女は皆こうしたもの」をジェンダーの枠から解き放ち、「人間みんな大したことない」と変容させるというテーマの読み替えに関しても、巧みな現代化のセンスが感じられた。

関西歌劇団スプリングオペラ モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》(6月6日)兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
演出：橋本恵史、ピアノ：高崎三千
末廣早苗(フィオルディリーゼ)、福井由美子(ドラベツラ)、孫勇太(フェッランド)、砂場拓也(グリエルモ)、山川大樹(ドン・アルフォンソ)、長太優子(デスピーナ)

3. 兵庫県立芸術文化センター

兵庫のみならず、関西全体にとって、このホールが関西のオペラ振興に多大な貢献をしてきたことは万人の認めるところである。春の恒例になった日本オペラ協会と共同で日本のオペラ振興に取り組む「日本オペラプロジェクト」では、再び團伊玖磨の《夕鶴》を取り上げた。10月にはローマ歌劇場が上演し

てきた舞台をアンドレア・バッティストーニの指揮で、九州から北海道まで、日本国内の広域の劇場・団体とイタリアの劇場とが共同で新制作をした《アイダ》も上演された。オペラは、演劇、音楽、美術、踊りなどの総合力の証左でもあり、その意味でも、劇場のアイデンティティともいえる芸術監督によるプロデュースオペラは、特別な意味をもつ。14作目となる佐渡裕芸術監督によるプロデュースオペラは、ウェーバーの《魔弾の射手》。

30年戦争で荒廃したドイツの深い森を舞台に繰り広げられる人間の業の物語。演出はドイツ出身のミヒヤエル・テンメ。あえて現代化をせず、歴史の記憶をたどるように、農民と狩人の世界、領主、悪魔、隠者、など様々な人間模様を、人物にフォーカスして丁寧に描き出した。その結果、古典派の音楽の簡潔さに根ざしつつ、人間の内面に広がる世界を豊かに表出したウェーバーの器楽と歌の素晴らしさが際立った。フリードリヒ・デパルムの舞台装置は、シュルレアリスムの絵画のように、現実と非現実の境界に漂う不思議な空間を創出し、透視幕に映し出された悪魔ザミエルの巨大な顔、空間に浮かぶアガーテの寝室など、新しいテクノロジーを使って心象風景や音楽を視覚的効果で象徴する手法が秀逸だった。

アリア、合唱、器楽、演劇的要素のタイミングを合わせ、テンポ良くまとめた指揮の佐渡裕のタクトも冴えわたった。アガーテを演じたソプラノのジェシカ・ミュアヘッドは、ビブラートがかかる無垢でクラシカルな声で、心の変容を丁寧に表現し、心惹かれた。存在感抜群のヒール役、バリトンの高田智宏演じるカスパー、テノールのトルステン・ケールの素朴で頼りないマックス。日本人と外国人のミックスキャストは、今や演劇界やミュージカルよりもグローバル化が進むオペラ芸術の先進性でもある。時代はなぜこの作

品を求めているのか。岐路に立たされ選択を迫られた人間の業を、オペラならではの表現で描いたドラマは、現代にも普遍的な強さを放っていた。

4. びわ湖ホール

びわ湖ホールは関西の劇場として自主制作オペラの数が大小合わせてもっとも多く、近畿全域のみならず、全国からその上演と活動が注目されている公立劇場である。芸術監督の沼尻竜典を中心に、2018年も活発に様々なタイプのオペラの上演が展開された。初心者にも魅力的にオペラの楽しみを紹介する「オペラへの招待」「沼尻竜典オペラセレクション」や玄人肌のワーグネリアンたちをも納得させる指環のツィクルスなどの企画には、日本オペラ界に重責を果たすびわ湖ホールの気概を感じる。こちらも、東京の新国立劇場とは《トスカ》、日生劇場とは《魔笛》で共同制作を行った。

2月の「オペラへの招待」では、フンパーディンクの歌劇《ヘンゼルとグレーテル》（演出：栗山昌良、美術：妹尾河童、指揮：角田鋼亮、大阪交響楽団）が日本語上演された。このシリーズでは、特にびわ湖ホール声楽アンサンブルと、大津児童合唱団など、ホールで育成した才能を紹介し、息の長い活動に繋げている。ライジングサン of 旬な若手演出家を起用するシリーズ「オペラへの招待」では、モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》が上演された。びわ湖での登場も多い指揮の園田隆一郎がチェンバロも担い、演出の伊香修吾はトークも行った。美術は二村周作、オーケストラは大阪交響楽団。その演出ノートからも、原作の意図とその広がりを緻密に読み取る知性派である伊香の演出は、場面転換も素晴らしく機能的で、全体的にシンプル。衣装は歴史的でオーソドックス。音楽のテンポは時に落ち着き過ぎる手堅さで、現

代化の題材としてつねに中心にあるモーツァルトでは、かなり感情や色や動きが抑制された舞台であった。逆に、モーツァルトが仕組んだアンサンブルの巧妙さや、レチタティーヴォの時のチェンバロとのウィットに富んだ掛け合いに集中できた。そのエネルギーは、すべてはラストのために抑制していたと思わせるほどの衝撃の地獄落ち。壁が実際に音を立てて落下していく。演出家としての勝負どころをきっちり押さえたラストと言える。ドン・ジョヴァンニが自ら破滅に向かって歩く、というのも、シャープで狡猾さが際立つ五島真澄のドン・ジョヴァンニにはぴったり嵌まり、ドンナ・アンナがひとり取り残されるラストも、含蓄のある終幕であった。

中核となる沼尻芸術監督のプロデュースオペラでは、ミヒヤエル・ハンペ演出、ヘニング・フォン・ギールケの幻想的な美術で、ワーグナーの「ニーベルングの指輪」のツィクルスの《ワルキューレ》が上演された。京都市交響楽団の壮麗でダイナミックな響きとともに、回を重ねるごとに、ツィクルス完結が楽しみになる歴史的な大プロジェクトといえる。「沼尻竜典オペラセレクション」では、日生劇場と提携し、10月にモーツァルトの《魔笛》が上演された。佐藤美晴の演出は「現代風の衣裳にスマホを持たせる」(関西新聞・横原千史 評)というような現代化で、オーケストラは日本センチュリー交響楽団の演奏。

びわ湖ホール・日生劇場提携オペラ公演 沼尻竜典オペラセレクション NISSAY OPERA 2018モーツァルト《魔笛》(10月6日) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール 指揮：沼尻竜典、演出・上演台本：佐藤美晴、管弦楽：日本センチュリー交響楽団、合唱：C. ヴィレッジシンガーズ

5. 大阪音楽大学 カレッジオペラハウス

創立百年を超える関西の名門音楽大学のオペラハウスも、人材育成と作品紹介で関西オペラ界に大きな役割を果たしてきた。2018年は「ディレクターズチョイス」と題して、栗國淳の演出、森香織の指揮で、メノッティの1幕ものオペラ《テレフォン》《泥棒とオールドミス》の2本立てを上演した。

メノッティは、イタリア出身のアメリカのオペラ作曲家として、絶妙なエンターテインメントの要素をもつ20世紀の喜歌劇を作曲した。日本の受容では、大戦後の米軍占領期を契機に盛んに上演され始めたという特異な上演史をもつ。20世紀前半のアメリカの新鮮なライフスタイルを、ヨーロッパの作曲家の目線で捉えた1幕ものオペラ・コミックは、どちらもピアノ版のセミ・ステージ形式でも楽しめるが、今回はオーケストラ版で上演された。もともと《泥棒とオールドミス》(1939年)は耳で味わい、イメージーションを働かせるラジオ放送用に書かれた。つまり、音楽の「身ぶり」が詞や歌唱だけでなく、クラリネットやファゴット、弦楽器、ピアノなどの器楽で表現され、物語が音色で巧妙に仕掛けられている。歌の背景やシーンの繋ぎで鳴り響き、繰り返されるオールドミス、トッド夫人の鼓動の表現なども、オーケストラ版では特に際立つ。舞台化の課題としては、舞台の動きと音楽との絶妙なタイミングが要求されるが、音楽を活かし、計算された動きを演出する栗國淳、音のジェスチャーを捉えた森香織指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、ともに全体の流れの軽妙さを失わず、登場人物の喜怒哀楽、演劇的な醍醐味を存分に味わえた。登場人物それぞれの性格を明確に描き出した児玉祐子、中嶋康子、田邊織恵、西尾岳史のコメディアン、コメディエンスたちの熱演も特筆に値した。

Ⅱ. プロと協働しながら行われる市民オペラ活動

プロと協働して行われる市民オペラ活動にも伝統がある。日本の洋楽史にとっても重要な役割を果たしてきた兵庫県の芦屋市民オペラは2002年創立だが、1967年から活動している市民オーケストラの芦屋交響楽団、市民合唱団とともに、メインキャストには関西オペラ界を代表する個性的なプロを配役し、本格的なオペラ上演でありながら、オペラの敷居を市民にとって親しみやすいものになっている。伊丹アイフォニックホールやAI・HALL（伊丹市立演劇ホール）など、「劇場の街」でもある伊丹でも、毎年春に行われるオペラ上演は、演出に井原広樹を迎えて、地元メディアなどでも取り上げられ、街ぐるみで盛り上がる人気の年中行事と位置付けられている。

1. 芦屋市民オペラ（2月4日 芦屋市民センター ルナ・ホール）

第17回芦屋市民オペラ（2002年創立）は、ヨハン・シュトラウスⅡ世の《こうもり》を日本語上演した。キャストを変えての1日2公演。配役は、関西の文化資源の高さを感じさせるように充実していた。主催は芦屋市、芦屋市民オペラ合唱団。指揮は、合唱指揮者としても活躍する西牧潤。演出は元兵庫県立ピッコロ劇団の俳優、辰寿広美。演奏は、1967年に設立された市民オーケストラ、芦屋交響楽団。合唱は芦屋合唱協会と芦屋市民オペラ合唱団による。優雅さの鍵となるバレエは、波多野澄子バレエ団（振付：藤井真理子）、プロデューサーは松本修志。このように、歌手のメインキャストは、関西二期会、びわ湖ホール声楽アンサンブルのソロ、関西オペラ界、声楽界の個性派が演じ、フロッシュも松竹で漫才コンビを組む弓川信男が配役された。

アイゼンシュタイン：油井宏隆／竹内直紀、

ロザリンデ：西垣千賀子／中井美内子、オルロフスキー：濱崎加代子／藤田果苗、アルフレード：中川正崇／水口健次、ファルケ博士：奥村哲／時宗務、アデーレ：小林慶子／高木有紀、フロッシュ：弓川信男（ボルトボルズ）

2. 伊丹市民オペラ（3月25日 東り いたみホール（伊丹市立文化会館））

第32回伊丹市民オペラ定期公演はロッシーニ《セヴィリアの理髪師》を日本語字幕でイタリア語上演した。

指揮：加藤完二、演出：井原広樹、合唱指揮：岩城拓也、演奏：伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団、合唱：伊丹市民オペラ合唱団、フラメンコ振付：中川マリ、アルマヴィーヴァ伯爵：西影星二、ロジーナ：高谷みのり、ドン・バルトロ：萩原次己、フィガロ：大谷圭介、ドン・バジリオ：片桐直樹、ベルタ：田中留美子、フィオレロ／隊長：大西信太郎、アンブロジーノ／公証人：田中崇由希

Ⅲ. 古楽を繋ぐ精神と新しい息吹：劇的器楽、中世の音楽劇、オペラ的なものへ

（*この項で取り上げられている公演は、「公演記録」には収録しておりません）

オペラといえば、モーツァルト以降、19世紀の作品を中心に上演されてきたが、近年、バロック以前の古楽への関心は高く、関西を拠点にした古楽の器楽のグループは数多く存在し、延原武春が音楽監督を務める日本テレマン協会など、息の長い活動をしている団体もある。関西のホールと連携して、「未知の世界への扉が過去に向かってどんどん開かれていく」ことは、オペラ的なものを理解するうえで、関西のオペラ界にも貴重な種を蒔くことになるだろう。

1. いずみホール

いずみホールでは「古楽最前線！」と題して様々な古楽の名手を紹介しているが、2018年は初期バロックまでが射程。ドイツの古楽器の管楽アンサンブルのカペラ・デ・ラ・トーレ、合唱はRIAS室内合唱団で、モンテヴェルディの劇的宗教曲《聖母マリアの夕べの祈り》が上演された。音楽学者の故 磯山雅が「未知の世界への扉が過去に向かって次々と開かれ、バッハ以前の音楽がどれほど生命力に富んだものかが明らかになってきた」というように、いずみホールと時間をかけて立てた拘りのある企画から、古楽の新しい扉が開かれる。後半のインプロヴィゼーションから、〈聖母マリアによるソナタ〉になり、四方八方から合唱が登場し、ホールの空間を存分に使った、躍動的な音の波に包まれて会場が一体になるような特別な体験だった。

古楽最前線！ 2018|中世・ルネサンスを経ての開花—初期バロックまで 躍動するバロック Vol.2 《聖母マリアの夕べの祈り》(11月7日) いずみホール

指揮：ジャスティン・ドイル、ソプラノ：ロテー・ミールズ、マーガレット・ハンター、テノール：トマス・ホップズ、マシュー・ロング、合唱：RIAS室内合唱団、管楽アンサンブル：カペラ・デ・ラ・トーレ(字幕付)
主催：いずみホール [(一財)住友生命福祉文化財団]

2. 古楽集団 アントネッロの試み:『エソポのハブラス』兵庫公演

1994年に結成された古楽アンサンブル ア

ントネッロは、コルネット奏者の濱田芳通が率いる古楽集団である。天草で1593年に印刷された西洋文学の刊行物『エソポのハブラス』をテーマにした音楽劇。日本に伝えられたイソップ物語を中心に、当時の世界の音の風景を描き出す。明治時代以前の日本人と洋楽との邂逅の物語でもあり、イマジネーションと知的好奇心を掻き立てられる舞台は、心と身体が軽やかに踊る素晴らしい演奏と構成の特筆すべき舞台となった。

今回の主催は、兵庫県立芸術文化センター。芸術と親しみやすさは、バランスが難しいが、プレトークもツボを押さえ、台本(タナカ・ミオ)も考え抜かれていて秀逸。グレゴリオ聖歌の精神と日本文化の邂逅を伝えた皆川達夫のオラショの研究のように、近代以前の日本とヨーロッパのグローバルな交流が音楽の側面から描かれるという知的刺激に満ちた音楽で綴る「物語」であった。このような舞台が、オペラという芸術への流れとともに存在するという意義をもっと積極的に見出しでもよいかもしれない。

古楽の愉しみ アントネッロの『エソポのハブラス』(11月3日) 兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

古楽アンサンブル：アントネッロ、ソプラノ(竹田イネス)：阿部雅子、テノール(河童にまちがわれた宣教師)中嶋克彦、ヴィオラ・ダ・ガンバ：石川かおり、チェンバロ／アルパ・ドッピア：西山まりえ、パーカッション：濱元智行、リコーダー／コルネット／音楽監督／企画構成：濱田芳通

主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター